

朗読を楽しむ——東急カルチャーB.E.雪が谷

2008年12月24日

小説を読む——太宰治「富嶽百景」

「トバ表現研究所 渡辺 知明

富士の頂角、広重の富士は八十五度、文晁の富士も八十四度くらゐ、けれども、陸軍の実測図によつて東西及南北に断面図を作つてみると、東西縦断は頂角、百二十四度となり、南北は百十七度である。広重、文晁に限らず、たいていの絵の富士は、鋭角である。いただが、細く高く華奢である。北斎にいたつては、その頂角、ほとんど三十度くらゐ、エッフェル鉄塔のやうな富士をさへ描いてゐる。けれども、実際の富士は、鈍角も鈍角、のろろと拡がり、東西、百二十四度、南北は百十七度、決して、秀抜の、すらと高い山ではない。

(2) 昭和十三年の初秋、思ひをあらたにする覚悟で、私は、かばんひとつさげて旅に出た。

甲州。この山々の特徴は、山々の起伏の線の、へんに虚しい、なだらかに在る。小島鳥水といふ人の日本山水論にも、「山の拗ね者は多く、此土に仙遊するが如し。」と在つた。甲州の山々は、あるひは山の、げてもものなのかも知れない。私は、甲府市からバスにゆられて一時、御坂峠へたどりつく。

新田といふ二十五歳の温厚な青年が、峠を降りきつた岳麓の吉田といふ細長い町の、郵便局につとめてゐて、そのひとが、郵便物に依つて、私がここに来てゐることを知つた、と言つて、峠の茶屋をたづねて来た。

(3) 新田は、それから、いろいろな青年を連れて来た。皆、静かなひとである。皆は、私を「先生」と呼んだ。私はまじめにそれを受けた。私には、誇るべき何もない。学問もない。才能もない。肉体よれて、心もまつしい。けれども、苦惱だけは、その青年たちに、先生、と言はれて、だまつてそれを受けて、いづらゐの、苦惱は、経て来た。たつたそれだけ。藁一すぢの自負である。けれども、私は、この自負だけは、はつきり持つてゐたと思つてゐる。わがままな駄々つ子のやうに言はれて来た私の、裏の苦惱を、一たい幾人知つてゐたらう。

(2) 新田と、それから田辺といふ短歌の上手な青年と二人は、井伏氏の読者であつて、その安心もあつて、私は、この二人と二ばん仲良くなつた。いちど吉田に連れていつてもらつた。おそろしく細長い町であつた。岳麓の感じがあつた。富士に、日も、風もさへぎられて、ひよろひよろに伸びた華のやうで、暗く、うすら寒い感じの町であつた。道路に沿つて清水が流れてゐる。これは、岳麓の町の特徴らしく、三島でも、こんな上合ひに、町ちゆうを清水が、どんとん流れてゐる。富士の雪が溶けて流れて来るのだ、とその地方の人たちが、まじめに信じてゐる。

(2) 路を歩きながら、ばかな話をして、まちはづれの田辺の知合ひらしい、ひっそり古い宿屋に着いた。

そこで飲んで、その夜の富士がよかつた。夜の十時ごろ、青年たちは、私ひとりを宿に残して、おのおの家へ帰つていつた。私は、眠れず、どてら姿で、外へ出てみた。おそろしく、明るい月夜だつた。富士が、よかつた。月光を受けて、青く透きとほるやうで、私は、狐に化かされてゐるやうな気がした。富士が、

したたるやうに青いのだ。燐が燃えてゐるやうな感じだつた。鬼火。狐火。ほたる。すすき。葛の葉。私は、足のないやうな気持ちで、夜道を、まっすべに歩いた。下駄の音だけが、自分のものでないやうに、他の生きもののやうに、からんろんからんろん、とても澄んで響く。そつと、振りむくと富士がある。青く燃えて空に浮んでゐる。私は溜息をつく。維新の志士。鞍馬天狗。私は、自分を、それだと思つた。ちよつと氣取つて、ふと手して歩いた。ずるずる自分が、いい男のやうに思はれた。

① 吉田に一泊してあゝる日、御坂へ帰つて来たら、茶店のおかみさんは、にやにや笑つて、十五の娘さんは、つんとしてゐた。私は、不潔なことをして来たのではないといふことを、それとなく知らせた。きのう一日の行動を、聞かれもしないのに、ひとりでもまかに言ひたてた。泊つた宿屋の名前、吉田のお酒の味、月夜富士、財布を落したと、みんな言つた。娘さんも、機嫌が直つた。

② 「お客さん！ 起きて見よ！ かん高い声で或る朝、茶店の外で、娘さんが絶叫したので、私は、しびしび起きて、廊下へ出て見た。

娘さんは、興奮して頬をまっかにしてゐた。だまつて空を指さした。見ると雪。はつと思つた。富士に雪が降つたのだ。山頂が、まっしろに、光りがやいてゐた。御坂の富士も、はかばかと思つた。

「いざ、い」

とほめてやめて、娘さんは得意なつた。

「すばらしいやうなやつ」といふ言葉使つて、「御坂の富士は、これでも、だめ。」

としやがんで言つた。私が、かねがね、「こんな富士は俗だめだ」と教へてゐたので、娘さんは、内心しよけてゐたのかも知れない。

「やはり、富士は、雪が降らなければ、だめなものだ。」もつともらしい顔をして、私は、さう教へなほした。

私は、どてら着て山を歩きまはつて、月見草の種を両手のひらに二ぱいとつて来て、それを茶店の背戸に播いてやつて

「いいかい、これは僕の月見草だからね、来年また来て見るのだからね、」お洗濯の水なんか捨てちやいけないよ。」娘さんは、うなづいた。

④ こゝろに、月見草を選んだわけは、富士には月見草がよく似合ふと思ひ込んだ事情があつたからである。御坂峠のその茶店は、隠は山中の一軒家であるから、郵便物は、配達されない。峠の頂上から、バスで三十分程ゆられて峠の麓、河口湖畔の、河口村といふ文字通りの寒村にたどり着くのであるが、その河口村の郵便局に、私宛の郵便物が留め置かれて、私は三日

④ 一度くらゐの割で、その郵便物を受け取りに出かけなければならない。天気の良い日を選んで行く。このバスの女車掌は、遊覧客のために、格別風景の説明をして呉れない。それでもときどき、思ひ出したやうに、甚だ散文的な口調で、あれが三ツ峠、向ふが河口湖、わかさぎといふ魚がゐます、など物憂な、眩きに似た説明をして聞かせるやうである。

④ 河口局から郵便物を受け取り、またバスにゆられて峠の茶屋に引返す途中、私のすべとなつたに、濃い茶色の被布を来た青白い端正の顔の、六十歳くらゐ、私の母とよく似た老婆が、ちゃんと坐つてゐて、女車掌が、思ひ出した

やうにみなさん、けふは富士がよく見えますね」と説明とつかず、また自分ひとりの咏嘆ともつかぬ言葉を、突然言ひだして、リリリサックしよつた若いサラリイマ、大きい日本髪ゆつて、口もとを大事にハンケチでおほひかくし、絹物まとつた芸者風の女など、からだをねち曲げ、一せいに車窓から首を出して、いまさらのびとく、その変哲もない三角の山を眺めては、やあ、とか、まあ、とか間抜けた嘆息を發して、車内はひとときり、さわめいた。けれども私のとなりの御隠居は、胸に深い憂悶でもあるのか、他の遊覧客とちがつて、富士には一瞥も与へず、かへつて富士と反対側の、山路に沿つた断崖をじつと見つめて、私にはその様が、からだがしひれるほど、快く感ぜられ、私もまた「富士なんか、あんな俗な山、見度くもない」といふ、高尚な虚無の心を、その老婆に見せてやりたく思つて、あなたのお苦しみ、わびしさ、みなよくわかる」と頼まれもせぬのに、其鳴の素振りを見せてあげたく、老婆に甘えかかるやうに、そつとすり寄つて、老婆とおなじ姿勢で、ぼんやり崖の方を、眺めてやつた。

老婆も何かしら、私に安心してゐたところがあつたのだらう、ぼんやりひとこと

「おや、月見草。」

さう言つて、細い指でもつて、路傍の一箇所をゆびさした。さうと、バスは過ぎてゆき、私の目には、いま、ちらりひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ、花卉もあややかに消えず残つた。

三七七八米の富士の山と、立派に相對峙し、みぢんもゆるがず、なんと言

ふのか、金剛力草とも言ひたいくらゐ、けなげにすつくと立つてゐたあの月見草は、よかつた。富士には、月見草がよく似合ふ。

お、あ、
2/25

●略年譜(フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』)

- * 1909年(明治42年) 青森県北津軽郡金木村大字金木字朝日山(現・五所川原市)に生まれる。
- * 1916年(大正5年) 町立金木尋常小学校に入学。
- * 1923年(大正12年) 県立青森中学校(新制県立青森高校の前身)入学。英語作文の成績に優れていた。
- * 1925年(大正14年) 中学の校友会誌に習作「最後の太閤」掲載。友人と同人誌『星座』発行。
- * 1927年(昭和2年) 第一高等学校(新制東京大学教養学部の前身の一つ)受験に失敗し、弘前高等学校(新制弘前大学の前身の一つ)の文科甲類(文系の英語クラス)に入学。同学年に作家石上玄一郎がいる。
- * 1928年(昭和3年) 同人誌『細胞文芸』を創刊。潤沢な資金を背景に、舟橋聖一や吉屋信子など多数の有名作家から原稿を貰った。このころ井伏鱒二の作品を知り、『細胞文芸』への執筆を依頼。井伏の「薬局室挿話」はこの時の作品である。
- * 1930年(昭和5年) 東京帝国大学文学部仏文学科入学。門人として井伏鱒二のもとに出入りするようになる。同年カフェの女給田部シメ子と鎌倉の小動岬で心中未遂を起こす。相手のシメ子のみ死亡したため、自殺幇助の容疑で検事から取調べを受けたが、長兄文治たちの奔走が実って起訴猶予となった。なお、この処分については、担当の宇野検事がたまたま太宰の父の実家である松木家の親類だったことや、担当の刑事がたまたま金木出身だったことが太宰にとって有利に作用したという説もある(中畑慶吉の談話)。
- * 1931年(昭和6年) 津島家から除籍され、小山初代と結婚。
- * 1933年(昭和8年) 『東奥日報』紙に短編「列車」を太宰治の筆名で発表。ペンネームを使った理由を、「従来の津島では、本人が伝ふときには『チシマ』ときこえるが、太宰といふ発音は津軽弁でも『ダザイ』である。よく考へたものだとは感心した。」と、井伏鱒二氏の回想「太宰君」にて記されている。
- * 1934年(昭和9年) 檀一雄、山岸外史、木山捷平、中原中也、津村信夫等と文芸誌『青い花』を創刊するも、創刊号のみで廃刊。
- * 1935年(昭和10年) 「逆行」が芥川賞候補となり次席。佐藤春夫に師事する。
- * 1937年(昭和12年) 小山初代が津島家の親類の画学生小館善四郎と密通していたことを知り、初代と心中未遂、離別。
- * 1938年(昭和13年) 石原美知子と婚約。山梨県に転居。
- * 1941年(昭和16年) 長女・園子誕生。
- * 1944年(昭和19年) 長男・正樹誕生。
- * 1945年(昭和20年) 青森県に疎開。
- * 1947年(昭和22年) 次女・里子(津島佑子)誕生。太田静子(1913-1982)の許を訪れた後、「斜陽」を書き上げる。太田との間に女兒(太田治子)誕生。

- * 1948年(昭和23年) 『人間失格』を発表。山崎富栄と玉川上水(東京都北多摩郡三鷹町、現・三鷹市)の急流にて入水心中、38歳没(満年齢)。ふたりの遺体は紐で固く結ばれていたが、太宰が激しく抵抗した形跡が歴然と残っていた。このため一部では「太宰は決行直前になって気が変わったが、山崎が強引に水の中へ引きずり込んだのだ」との説や、最初から死ぬ気のなかった太宰を、富栄が強引に引きずり込んだともささやかれた。『朝日新聞』に連載中だったユーモア小説「グッド・バイ」が遺作となった。奇しくもこの作品の13話が絶筆になったのは、キリスト教のジnkスを暗示した、太宰の最後の洒落だったとする説(檀一雄)もある。遺書には「小説が書けなくなった」旨が記されていたが、一人息子がダウン症で知能に障害があったことを苦にしていたのが自殺の原因のひとつだったとする説もある。既成文壇に対する宣戦布告とも言えるべき連載評論「如是我聞」の最終回は、死後に掲載された。なお、夫人宛の遺書には大きな文字で「おまえを誰よりも愛していました」と書いてあった[要出典]。杉並区堀ノ内にて茶毘に付される。戒名は文綵院大猷治通居士。墓所は三鷹市の禅林寺。

●作品一覧

- * 晩年(1936年、砂子屋書房)
- * 虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ(1937年、新潮社)
- * 二十世紀旗手(1937年、版画荘)
- * 愛と美について(1939年、竹村書房)
- * 女生徒(1939年、砂子屋書房)
- * 皮膚と心(1940年、竹村書房)
- * 思ひ出(1940年、人文書院)
- * 走れメロス(1940年)
- * 女の決闘(河出書房)
- * 東京八景(1941年、実業之日本社)
- * 新ハムレット(1941年、文藝春秋新社)
- * 千代女(1941年、筑摩書房)
- * 駆込み訴へ(1941年、月曜荘)
- * 風の便り(1942年、利根書房)
- * 老ハイデルベルヒ(1942年、竹村書房)
- * 正義と微笑(1942年、錦城出版社)
- * 女性(1942年、博文館)
- * 富嶽百景(1943年、新潮社)
- * 右大臣実朝(1943年、錦城出版社)
- * 佳日(1944年、肇書房)
- * 津軽(1944年、小山書房)
- * 新釈諸国噺(1945年、生活社)
- * 惜別(1945年、朝日新聞社)
- * お伽草紙(1945年、筑摩書房)
- * パンドラの匣(1946年、河北新報社)
- * 薄明(1946年、新紀元社)
- * 冬の花火(1947年、中央公論社)
- * ヴィヨンの妻(1947年、筑摩書房)
- * 斜陽(1947年、新潮社)
- * 人間失格(1948年、筑摩書房)